

トピックス

空間的視点取得と心的視点取得との関連について

—誰かの目に映る光景を想像することと、誰かの気持ちを理解すること—

教育開発センター講師 神原 歩

社会の中で生きる私たちにとって、相互作用をする誰か（以後、相手）の気持ちを考えることは重要である。相手の気持ちを考えることを表す言葉には、「相手の立場にたつ (putting yourself in someone's shoes)」、「相手の見方を理解する (understanding a point of view)」など、空間的・身体的位置表現が多く用いられている。本稿は、物理的な相手の位置からの眺めを想像することと、相手の心的状態を理解することとの関連について、これまでの研究を概観し考察する。

他者の心的経験の推測の歪み

1990年代から、自分の思考や感情が他者にどの程度伝わっているかについての推測や判断に関する研究が盛んに行われるようになった。これまでの研究成果は、人にとって相手の気持ちを正しく推測することが如何に難しいかを示している。例えば、人は、ペンで机を叩いてリズムをとるという方法で表現した楽曲名を、前に座っている相手が当てる確率 (Griffin & Ross, 1991)、自分が飲み物を不味いと思ったことを相手が言い当てる確率 (Gilovich, Savitsky, & Medvec, 1998)、自分の不安や緊張感が相手に伝わっている程度 (遠藤, 2007; Savitsky & Gilovich, 2003)を事実よりも高く推測するなど。すなわち、人は、自分自身の思考や感情が、実際以上に相手に伝わっているように感じているということである。

このような傾向がみとめられる原因は、次のように説明されている。他者の気持ちを考えようとしたとき、まず自動的に自分の心の中すなわち思考や感情（心的経験）が思い浮かぶ。そして、その自分の心的経験を係留点とし、そこから調整して他者の心的経験を推測する。但し、そのプロセスには労力がかかるため、一般的に不十分なものとなりやすい (Tversky & Kahneman, 1974)。結果として、他者の心的経験を、自分の心的経験と実際以上に類似したものとして捉えてしまうという。すなわち、他者は何を感じて

いるのかを理解しようとしても、結局は自己の視点から完全に離れることが難しいということである。このような、自分と他者との心的経験を実際以上に類似しているように捉える傾向は、自己中心性バイアス (egocentric bias, egocentrism) と呼ばれている (e.g., Gilovich, 2002; Ross, Greene & House, 1977)。

自己中心性バイアスは、「このくらいは、わかるだろう」という過度な期待や、「なんでわかってくれないのだ」という不満の原因となりうるなど、対人相互作用に悪影響を及ぼすことが多い^{*1} (e.g., Chambers & De Dreu, 2014)。そこで、自分の視点を離れて他者の心的状態を想像・理解する (以後、心的視点取得^{*2} (perspective taking; Davis, 1983) と呼ぶ。) ことが必要となる。心的視点取得 (psychological perspective-taking) の促進方法「人に、いかにして相手の気持ちを正しく理解させるか」は心理学者の関心を集め研究がなされてきた。そして、相手の役割をロールプレイで体験する (古見・子安, 2012)、事前に相手とコミュニケーションをとる (林・三輪, 2011)、相手の気持ちを慎重に考える (Wimmer & Perner, 1983) などによって、相手への共感が高まることが示されてきた。

これらの研究は、他者への共感的反応を促進する方法を見出すという大きな成果をあげたといえる。ただし、その方略が生んだ「結果」にのみ注目がなされ、どのようなメカニズムで心的視点取得が生じているのかについては十分に検討がなされていない。

心的視点取得と空間的視点取得との関連について

心的視点取得は、どのようなメカニズムで生じ、その遂行にはどのような能力が関与しているのだろうか。本稿では紙幅に限りがあることから、空間的視点取得 (visuospatial perspective-taking) との関連に焦点をあて、2000 年以降の研究を中心にレビューする。

空間的視点取得とは、自分の物理的位置と異なる位置からの眺めを想像することである。三次元空間内の特定の位置に自己の身体表象を移動させ (以後、仮想的身体移動 (imaginary body movement) と呼ぶ)、その位置からの見えを構成する過程を含むとされている (e.g., Diwadkar & McNamara, 1997; Kozhevnikov & Hegarty, 2001)。前項の他者の心的経験の推測過程と空間的視点取得過程とは、「自分の心的経験 (見え) から出発」し、「そこから調整 (仮想的身体の移動)」して「相手の心的経験 (見え) を推測する」という点で共通しているように見受けられる。

空間的視点取得と心的視点取得には、共通する基盤があるのだろうか。脳科学の分野においても、空間的視点取得と心的視点取得とに共通基盤が存在する可能性が指摘され

ているが、まだ断定はされていない状態にある（渡部, 2013）。心理学の分野でも、心的視点取得に的を絞ったものではないが、一般的な対人関係スキルと空間的視点取得能力との関連を示唆する知見が積み重ねられている。例えば、ソーシャルスキル尺度や共感スキル尺度などへの自己評定と、空間的視点取得課題成績との間に正の相関が認められることが報告されている（e.g., Shelton, Clements-Stephens, Lam, Pak, & Murray, 2012; Thakkar, Brugger, & Park, 2009）。また、誤信念課題（Wimmer & Perner, 1983）などメンタライジング課題があまり得意ではないことが知られている自閉症スペクトラム傾向が高い人は（cf. Batson, 2009; Davis, 1994）、自閉症スペクトラム傾向が低い人と比較して、仮想的身体移動が得意でないことが示されている（Hamilton, Brindley, & Frith, 2009; Pearson, Marsh, Ropar, & Hamilton, 2016）。更に、Kessler and Wanga (2012)は、自閉症スペクトラム指数の他の得点（注意力やコミュニケーション力得点）でなく、ソーシャルスキル得点が空間的視点取得課題の成績を説明することを示した。そして、ソーシャルスキルが低い人ほど、空間的視点取得の際に仮想的身体的移動を用いていない可能性を指摘している。これらの研究結果は、物理的に相手の位置からの見えを想像する能力と、対人関係スキルとの関連を示唆していると言える。

更に、ソーシャルスキルや共感などの広い概念ではなく、心的視点取得に特化して空間的視点取得能力との関連を示した研究として Erle and Topolinski (2015) が挙げられる。Erle and Topolinski (2015) は、対人反応性指標（IRI; Davis, 1983）を用いて、自発的に他者の心的視点を獲得しようとする傾向「視点取得（Perspective Taking）」、架空の人物の感情や行動に自身を投影して想像する傾向「想像性（Fantasy）」、他者に対する同情や配慮などの他者指向的な感情「共感的配慮（Empathic Concern）」、他者の苦しむ場面における不安や不快などの自己指向的な感情「個人的苦痛（Personal Distress）」の 4 つの下位尺度に自己評定を求め、同参加者の空間的視点取得課題成績との関連を調べた。そして、4 つの下位尺度の中で「視点取得」のみ、空間的視点取得課題成績と正の相関が認められることを示した。また、それらの関係は IQ の高さを統制しても認められることが判った。

課題と展望

前項で挙げた全ての先行研究において、対人関係スキルなどの指標に、回答者の自己評価を用いている。すなわちこれらの研究が示したのは、心的視点取得関連スキルについての自己評価と空間的視点取得課題成績との相関関係であり、空間的視点取得が実際に他者の心的経験を正確に理解することに関わっているかを示すには至っていない。自

己評価は、個人の感情や認知傾向を反映してはいるが、実際の遂行状況とは異なる可能性はたびたび指摘されている (e.g., 相川, 2000; 2008)。従って、実際の遂行状況と一致しているかについては疑問が残る。今後、実際に他者の心的経験の正確さを測定する実験的パラダイムを用いて検証することが必要であろう。

また、Erle and Topolinsk (2017) は、上記のような相関研究に対する疑問から、相手 (ターゲット) の位置まで仮想的身体移動をする群とそうではない群を設け、仮想的身体移動をすることによって参加者の心的状態にどのような変化が生じるかについて実証的に検討した。そして、相手の位置まで仮想的身体移動をすることによって、相手に同調しやすく、共通点を感じやすく、更に好意を抱きやすくなることを示した。従って、仮想的身体移動が心的状態に与える影響を直接的に実証したといえる。但し、Erle and Topolinsk (2017) は親密性を取り上げており、仮想的身体移動が心的視点取得「相手の気持ちの正しい理解」を促すかについては未だ明らかになっていない。Erle and Topolinsk (2017) の手続きを応用することによって、相手の位置まで仮想的身体移動をすることが、相手の気持ちを正しく理解する効果をもたらすのかについて検討が望まれる。

注 1：自己中心性バイアスは、親密な対人関係においては、ポジティブな影響を与えるという知見もある (e.g., Murray, Holmes, Bellavia, Griffin, & Dolderman, 2002)。

注 2：古くから 3 つの視点取得の存在が指摘されてきた。知覚的 (visuo-spatial)、認知的 (cognitive)、感情的 (affective) 視点取得である (see, e.g., Davis, 1994; Enright & Lapsley, 1980; Ford, 1979)。近年、感情的と認知的視点取得の測定には、同じ様な方法が使用されており、2 種類の境界はほぼ消失している (Erle & Topolinsk, 2017)。本稿では、Erle & Topolinsk (2017) に倣って、後に登場する空間的視点取得 (知覚的 (visuo-spatial) 視点取得に相当) と区別する為に、後者 2 つをまとめて “心的視点取得 (psychological perspective-taking)” と記す。

注 3：空間的視点取得は、異なる視点から特定のものが「見えるか見えないかを推測する (レベル 1)」、「どのように見えるかをイメージする (レベル 2)」の 2 段階に分類されており、レベル 2 の過程が心的視点取得と類似している可能性が指摘されている (Kessler & Rutherford, 2010; Kessler & Thomson, 2010)。

引用文献

- 相川充 (2000). セレクション社会心理学 20 人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－サイエンス社
- 相川充 (2008). 小学生に対するソーシャルスキル教育の効果に関する基礎的研究：攻撃性の分析を通して. 東京学芸大学紀要, 59, 107-115.
- Batson, C. D. (2009). These things called empathy: Eight related but distinct phenomena. In J. Decety & W. Ickes (Eds.), *The social neuro-science of empathy* (pp. 3–16). Cambridge, MA: MIT Press.
- Chambers, J. R., & De Dreu, C. K. (2014). Egocentrism drives misunderstanding in conflict and negotiation. *Journal of Experimental Social Psychology, 51*, 15-26.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology, 44*, 113-126.
- Davis, M. H. (1994). *Empathy: A social psychological approach*. Boulder, CO: Westview Press.
- Diwadkar, V. A. & McNamara, T. P. (1997). Viewpoint dependence in scene recognition. *Psychological Science, 8*, 302-307.
- 遠藤由美 (2007). 自己紹介場面での緊張と透明性錯覚. 実験社会心理学研究, 46, 53-62.
- Enright, R. D., & Lapsley, D. K. (1980). Social role-taking: A review of the constructs, measures, and measurement properties. *Review of Educational Research, 50*, 647-674.
- Erle, T. M., & Topolinski, S. (2015). Spatial and empathic perspective-taking correlate on a dispositional level. *Social Cognition, 33*, 187-210.
- Erle, T. M., & Topolinski, S. (2017). The grounded nature of psychological perspective-taking. *Journal of Personality and Social Psychology, 112*, 683-695.
- Ford, M. E. (1979). The construct validity of egocentrism. *Psychological Bulletin, 86*, 1169–1188.
- 古見文一・子安増生 (2012). ロールプレイ体験がマインドリーディングの活性化に及ぼす効果 心理学研究, 83, 18-26.
- Gilovich, T. (2002). Egocentrism and the social self: Anchoring (and adjustment) in self and social judgments. (In) J. P. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *The social*

- self: Cognitive, interpersonal, and intergroup perspectives*. New York: Psychology Press.
- Gilovich, T. Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The illusion of transparency: biased assessments of others' ability to read one's emotional states. *Journal of Personality and Social Psychology*, *75*, 332-346.
- Griffin, D., & Ross, L. (1991). Subjective construal, social inference, and human misunderstanding. In M. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 24, pp. 319-356). San Diego, CA: Academic Press.
- Hamilton, A. F. d. C., Brindley, R., & Frith, U. (2009). Visual perspective taking impairment in children with autistic spectrum disorder. *Cognition*, *113*, 37-44.
- 林勇吾・三輪和久 (2011). コミュニケーション齟齬における他者視点の理解. *認知科学*, *18*, 569-584.
- Kessler, K., & Rutherford, H. (2010). The two forms of visuo-spatial perspective taking are differently embodied and subserve different spatial prepositions. *Frontiers in Psychology*, *1*, 213.
- Kessler, K., & Thomson, L. A. (2010). The embodied nature of spatial perspective taking: Embodied transformation versus sensorimotor interference. *Cognition*, *114*, 72-88.
- Kessler, K. & Wanga, H. (2012). Spatial perspective taking is an embodied process, but not for everyone in the same way: Differences predicted by sex and social skills score. *Spatial Cognition and Computation: An Interdisciplinary Journal*, *12*, 133-158.
- Kozhevnikov, M. & Hegarty, M. (2001). A dissociation between object manipulation spatial ability and spatial orientation ability. *Memory and Cognition*, *29*, 745-756.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., Bellavia, G., Griffin, D. W., & Dolderman, D. (2002). Kindred spirits? The benefits of egocentrism in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 563-581.
- Pearson, A., Marsh, L., Ropar, D., & Hamilton, A. (2016). Cognitive Mechanisms underlying visual perspective taking in typical and ASC children. *Autism Research*, *9*, 121-130.
- Ross, L., Greene, D., & House, P. (1977). The "false consensus effect": An egocentric bias in social perception and attribution processes. *Journal of Experimental*

Social Psychology, 13, 279-301.

Savitsky, K., & Gilovich, T. (2003) The illusion of transparency and the alleviation of speech anxiety. *Journal of Experimental Social Psychology*, 39, 618–625.

Shelton, A. L., Clements-Stephens, A. M., Lam, W. Y., Pak, D. M., & Murray, A. J. (2012). Should social savvy equal good spatial skills? The interaction of social skills with spatial perspective taking. *Journal of Experimental Psychology: General*, 141, 199-205.

Thakkar, K. N., Brugger, P., & Park, S. (2009). Exploring empathic space: Correlates of perspective transformation ability and biases in spatial attention. *PLoS One*, 4, e5864.

Tversky, A., & Kahneman, D. (1974). Judgment under uncertainty: Heuristics and biases. *Science*, 185, 1124-1131.

渡部雅之 (2013). 空間的視点取得の脳内機序と生涯発達. *心理学評論*, 56, 357-375.

Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding deception. *Cognition*, 13, 103-128.

追記:本稿は、京都学園大学平成 29 年度奨励研究助成を受けた研究成果の一部である。